

市場分野での収益性向上に 貢献するTGIFS

—新分野ではレベニューシェア方式も提案—

TGIFS 株式会社ティージーアイ・フィナンシャル・ソリューションズ
Your Most Trusted Partner
 代表取締役社長 竹腰秀則氏 (聞き手 MSOG編集部 富田、鈴木)



MSOG

市場系ソリューションへの
貴社の取り組みと体制は

竹腰 市場取引管理やリスク管理に対応する「Prélude Enterprise」という名称のフロント・ミドルオフィス用パッケージソリューションの提供が中心です。社内に金融工学センターを設け、メソドロロジー面からPréludeの開発をバックアップできる体制を整えています。有価証券、OTCデリバティブなどの評価手法を開発、実装しており、金融工学分野でも顧客を支援しています。今後さらに認知度を上げて、評価手法の高度化を多面的に支援していきたいと思っています。

MSOG

ユーザーは地域的に
広がりを見せています

竹腰 弊社では厳格なセキュリティの下でリモートアクセス環境を作り、そこからのサポートが基本。金融機関の方には、リモートサポート環境を直接検証して頂いています。フロント系ソリューションを導入されている企業の海外拠点のサポートが最近増えてきましたが、お客様の展開に合わせて国内から海外までサポートしていく方針です。海外も導入時以外はリモートで保守をしており、体制は万全です。

MSOG

GMS2011での
講演・展示内容と狙いは

竹腰 展示ブースでは、「Prélude Enterprise」のパッケージのご説明と仕組債評価のツール「NX-FS」をご紹介します。データフィード(QUICKの「ACTIVE MANAGER」)と連動したデモもお見せする予定です。また、講演の一つでは、先端的な金融評価モデルの高度化について、金融工学センターの取り組みをお話します。

MSOG

竹腰社長の講演演題に
「レベニューシェアによる
新サービス形態」とあり、
大変興味深いのですが

竹腰 現在のソフトウェア投資が、クオリティを反映しているのかという点に疑問を持っていました。基本的に費用は、投入した期間と単価によって決まってしまう総括原価主義なやり方で、高品質なものを作っても、その点が価格に反映されているとは言えません。また、ユーザーにとっては、開発規模に応じた大きな維持コストも必要となります。情報化投資以外は、ROIを厳密に管理しているのに、情報化分野では、投資効果の計測がそれほど厳密になされていない印象があります。現状は、投資サイド、開発サイド、どちらにとっても効率の良い状態とは言えませんので、収益への貢献が反映されるように導入企業と弊社によるレベニューシェア方式を提案しています。

既に試行的にレベニューシェアを実施している顧客もあります。初期投資は双方でシェアし、成果を見て、業績連動でのレベニューシェアに移行する予定。初期投資は抑えてフィージビリティ調査をしますが、ユーザーもTGIFS双方がリスクテイクして、投資を行う形です。

MSOG

現在の環境で金融機関が
取り組むべき課題と貴社が
果たす役割は

竹腰 アローヘッド、J-GATEなど新たな売買システムが導入され金融取引は益々高度化しています。しかし、プレーヤーがそれに追従しきれていないのが現状のようです。複雑化、高度化する取引を上手に利用していくためには、IT投資がそれなりに必要になります。ただ、現在の経済環境では投資も難しいのが実情です。収益が上がらないと、IT投資が難しい状況なので、レベニューシェア形式も提起させて頂いています。金融機関が収益性を上げるためのヒントをソリューションで具体化、実現化し貢献をしていきたいと考えています。

MSOG

リスク管理分野での
課題は？

竹腰 規制対応は要件も整ってきており、ソリューションも出揃ってきています。しかし、そもそも“何のためのリスク管理か”を再考する必要があるように思います。規制対応のリスク管理は、説明責任を果たすために必要ですが、本来のリスク管理とは、事前に取りべきリスク量の妥当性、リスク量が高いものに対しては、どういうコントロールが必要かを考えてダイナミックな対応を可能にする事が求められるでしょう。そのため、適正なレベルでのリスクコントロールができるように、現在、きめ細かいシミュレーション機能を強化しています。基本的に金融は、リスクを最小化し、収益を最大化するものなので、その管理には、規制にかかわらず取り組む事が重要でしょう。

MSOG

最後にメッセージは

竹腰 金融機関には、是非、市場分野でさらに力を付けて、収益を上げてほしいと思っています。セルサイドが新しい商品を投入し、バイサイドが市場運用で収益を向上できるように、IT面から貢献をしていくつもりです。(インタビュー日 2011年6月14日)